

○昭和三十四年度漢文学会総会

〔漢文教育研究会〕 六月廿日 於都立小山台高校

一、研究授業 午前十時半～十二時半 青木木菟哉氏

一、研究会 十一時半～十二時半 司会 今井宇三郎氏

(イ) 開会の辞 小島委員

(ロ) 当番校挨拶 上原好一校長

(ハ) 教授者反省 舞田正達主任

(ニ) 討 論 青木木菟哉氏

一、討議会 午後一時半～三時四十分 司会 牛島徳次氏

(イ) 問題提起 志賀 一朗氏

1、略体漢字の問題について 小島 政雄氏

2、「全国高等学校協議会」における 鎌田 正氏

(ロ) 討 論

(イ) 閉会の辞 内野委員長

〔研究発表会〕 六月廿一日 於教育大学

一、江南義疏家と王弼佚注 藤原 高男氏

一、唐代小説に含まれる詩について 新潟大学 内山 知也氏

一、新訓点法の一考察 大泉高校 志賀 一朗氏

一、司馬相如・楊雄・班固に流れる一流文学意識 教育大学 鈴木 修次氏

問」の両篇であり、他の一卷は東洋文庫蔵で「衛霊公と季氏」の兩篇である。これは中原師秀の文永五年（三二六）書写した家本である。高山寺本は、京都梅尾高山寺蔵の二卷であつて、第一卷は「述而と泰伯」の兩篇、第二卷は「衛霊公と季氏」の二篇である。そしてこれは、中原師有の嘉元元年（三〇三）書写した家本である。そこで中原家本は残卷四卷八篇であるがその中、重複篇があるので、三卷六篇となる。さて、これらの残書によつて、中原家各家本の経注文・訓説などの共通点乃至相違点の考察により、所謂中原家論語家学を究明し、併せて宗重本・宝左庵本・徳治本・元応本などの性格を検討し、その系統を明らかにしようと思う。

七、無と和との問題

福井大学 寺 岡 竜 含

「無とは何であるかという問題」と「和とは何であるかという問題」とは、哲学としての永遠の課題であらう。無と和とをそれぞれ探索し、概念化し表現し得たと考えた時には、恐らく無でも和でもなくなるであらう。

しかし、ここにおいては先覚が努力したあとをたどりながら、無の字源と和の字源とを考究し、無の用法と和の用法とを探索する、そうして無の問題と和の問題とを取扱い、結局妄言するならば無は体であり和は情であることに想到し、できうる限り真実に近いものを論究してみたい。

一、魏晉南北朝における尊降服制について

香川大学 藤川 正数氏

一、中原家論語家学とその系統本 東京学芸大学 新美 保秀氏

一、無と和の問題 福井大学 寺岡 竜含氏

〔総 会〕

一、開会の辞 牛島委員

一、挨拶 内野委員長

一、報告並に議事

1、議長選出 寺岡竜含氏

2、各部報告

(イ) 庶務報告 今井委員

(ロ) 研究一報告 小島委員

(ハ) 研究二報告 牛島委員

3、議 事

(イ) 昭和三十三年度収支決算 兼昭和三十四年度予算

(ロ) 來年度会員名簿印刷の件

(ハ) 高等学校教育課程国語科改訂に関する意見 鎌田委員

○昭和三十四年度例会

六月六日

研究会

比興論の展開と象徴詩

横山伊勢雄氏

十二月五日

雑誌会

阿部吉雄氏「宋明の倫理想」〔昭三四・二〕(世界倫理想史叢書)

木南卓一氏「北宋思想界の動向」(懷徳一九・昭三三、一〇)

今井宇三郎氏

研究会 新美 保彦氏

我国古伝論語諸古写書入れ中より発見せられた

鄭玄論語「魯誦從古」例の新資料

○昭和三十五年漢文關係講義

(一) 一般教育科目

内野 教授 漢文講読(思想)

小林 教授 (文学)

(二) 外国語

牛島 助教授 中国語一、(文法)

北浦 講師 (読本)

長谷川 講師 一、(作文)

陳 講師 二、(公話)

(三) 専門科目

内野 教授 中国思想史

小林 教授 演習(論語集注)

鎌田 教授 (中庸)

中国哲学概論並特講 (老荘)

中国思想史漢習(左伝)

日本漢文学演習(経国集)

牛島 助教授

中国言語学漢習 (漢語)

小林 教授

中国哲学演習 (論語集注)

中国言語学講義ならびに講読

内野 教授

中国哲学概論並特講

鈴木 助教授

中国文学概論 (六朝)

鎌田 教授

中国哲学演習 (荀子)

中国文学演習 (白樂天)

河野 教授

中国哲学演習 (孟子集注)

中国言語学特講

牛島 助教授

中国言語学特講

中国言語学演習

鈴木 助教授

中国文学概論

日本漢文学史

河野 教授

中国言語学特講

中国文学史 (宋以後)

今村 教授

中国文学演習 (前期陶淵明)

史記講読

水沢 講師

中国文学演習 (後期謝靈運)

漢文学講読 (思想)

小野 講師

中国文学史

(文学)

今村 講師

中国言語学演習

中国語一 (文法・作文)

小野 講師

中国言語学演習

中国語一 (講読)

水沢 講師

中国言語学演習

中国語 (公託)

今村 講師

中国言語学演習

○昭和三十四年度漢文関係講義

(一) 一般教育科目

小林 教授 漢文学講読 (思想)

(二) 一般語学

鎌田 教授 漢文学講読 (文学)

牛島 助教授 中国語一 (文法・作文)

北浦 講師 中国語一 (講読)

(三) 専門科目

小林 教授 中国思想史

中国関係図書専門店

山本書店

東京都千代田区神保町二の七
(電話) 九〇三八三四七七
(331) 九〇三八三四七七
振替 東京 五九九五〇

極東書店

本社 東京都千代田区神田神保町二の二
(振替) 東京 一〇〇〇〇九 (電) 七六一七
(331) 六四三二
出張所 京都市上京区河原町通り荒神口下ル
関西 (振替) 京都 五八二九 (電) (8) 七九九二

中国図書・中国関係書

専門取扱

株式会社 大安

東京都千代田区神田神保町二ノ四
(331) 一六一二・五六四〇
振替 東京 一九二六一

和漢古書籍売買

松雲堂

東京都千代田区神保町三ノ一
電話 (331) 六四九八

東京文理科大学
名譽教授
文学博士
諸橋 轍次 著

大漢和辞典

古今の典籍万巻

を網羅した不朽

の大著遂に完成

結集 完結 出版 巻出 全記 念予 約募

6 月末日申込締切迫る

B 5・総計 15,000 頁・各巻 1,100 頁

製 6,000 円
価 5,000 円
定価・各巻 特上 製

御購 御遠慮なく書店
他御遠慮なく書店
その他御遠慮なく書店
御購 御遠慮なく書店
他御遠慮なく書店
御購 御遠慮なく書店

三十五年の歳月を費し、資料の蒐集・文字語彙の採択・編纂などすべて著者一人が立案した空前絶後の大漢和辞典である。親文字数約四九、〇〇〇字、語彙・熟語数約五二六、〇〇〇語、挿絵図数約二、八〇〇個を取め、印刷は本辞典のために特別に作った細明朝体の写真植字により、別ずきの用紙を用いた。製本は美麗、堅牢。東洋文化研究には必備の書であり、子々孫々におくる不朽の大文化財である。

東京都千代田区神田錦町三ノ二四
大修館書店

文学博士 福井康順著

最近刊 東洋思想史研究

道教の基礎的研究

影瑠川眞氏仿宋本(返点符)

叢論 語集

水世嬭・中山時子編著

生活 與 會話

―趣味と生活の中国語学習書

標準 中国語 北浦藤郎・加賀美嘉富著
大山正春・中山時子著

加賀美嘉富著

注音 中国語中級

東京都文教区湯島二の一湯島聖堂構内

書籍 文物流通会

電話 小石川(92)四六〇六
振替 東京二一九九六番

A 5 版 四〇〇頁
A 5 版 二〇〇頁
A 5 版 一〇〇頁
A 5 版 約五〇〇頁
定価 一〇〇〇円

一函二本 二四〇円

菊版 凡一五八頁
定価 三四〇円

B 6 版 一五七頁
定価 二五〇円

B 6 版 一〇〇頁
定価 一八〇円

藤川正教著

魏晉時代 喪服礼の研究

堀留吉著

白 楽 天 ―生活と文学―
A 5 版箱入上製 二三〇〇円
A 5 版箱入上製 四五〇円

内野熊一郎編

中国思想 文学史

竹田 復編

初歩の論語
B 6 版並製 一〇〇円
A 5 版並製 六五円

東京都新宿区
市谷砦土原町アヒ敬文社
電話(三三〇)三八二八
振替東京二四八八八

○東京教育大学漢文学会々則

- 一、本会は東京教育大学漢文学会と称し、事務所を東京教育大学漢文学研究室に置く。
- 二、本会は漢文学及び漢文教育の研究と普及とを図るのが目的である。
- 三、本会の会員は左の通りである。
 - 1 東京教育大学漢文学及び東京文理科大学、東京高等師範学校の漢文学関係教官（退官者を含む）
 - 2 東京教育大学漢文学専攻学生及び卒業生、並に東京文理科大学漢文学専攻卒業生
 - 3 其の他入会を希望する者
- 四、本会の主な事業は左の通りである。
 - 1 総会 年一回
 - 2 例会 年約七回
 - 3 会報及び会員名簿の発行
 - 4 其の他必要な事項
- 五、本会の役員は左の通りである。

委員長	一名
委員	若干名
- 六、委員長は本会を代表し委員と共に運営に当る。
委員は委員会を組織し会の研究会計庶務を分担する。
- 七、委員長は委員の互選による。
委員は東京教育大学学生中から五名、其の他から若干名（一般会員より四名、及び東京教育大学助手）を委員の互選（学生委員は学生の互選）によって選挙する。その任期は二年（学生委員は一年）とする。但し重任は差し支えない。
- 八、会員は会費年額四百円、（但し学生は半額）を納める。
- 九、本会会則の変更は委員会の審議を経て総会出席者の過半数の承認を得なければならぬ。

後 記

○昨年に引き続き、今年も会報を発行することのできたのは、会員諸氏の各面よりする御協力の賜物である。今後益々学会発展のため御協力をお願いしたい。

○今年も総会での意向もあって、高松市で印刷することにした。これについては、高松在住の会員、倉田貞美・藤原正数・小林久磨・藤原高男の各氏に編集校正等の労を煩わした。こゝに深甚の謝意を表し置きます。

（牛島・安居）

漢文学会々報第十九号

昭和三十五年六月二十日印刷
昭和三十五年六月廿六日発行

（非売品）

編輯者

東京教育大学 牛 島 徳 次
漢文学会 安 居 香 山

印刷所

香川県高松市観光通一ノ一〇二五
株式会社 牟禮印刷所

東京都文京区大塚窪町二四

発行所

東京教育大学漢文学会
振替東京四七六〇〇番